

2016年10月9日

福音書からのメッセージ

その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。
(ルカによる福音書 17 章 15 節)

今日の物語には、重い皮膚病を患っている 10 人の人が出てきます。当時、重い皮膚病にかかったら、社会から完全に隔離されていました。病気が治ることはまずありませんでした。だから彼らには、生きる希望も夢もありませんでした。わずかな施しを与えられながら、小さな村の隅でひっそりと暮らしていたのです。

そこにイエス様がやって来ます。彼らは遠くの方からイエス様に向かって叫びます。「イエス様、先生、どうかわたしたちを憐れんでください」。叫ぶ彼らを、イエス様は遠くからじっと見ます。この「見る」という言葉には、知るというニュアンスが含まれています。イエス様は見ることで、彼ら 10 人の痛み、苦しみを知ります。そして彼らに命じられます。「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と。

彼ら 10 人はイエス様に触れられもせず、いやされたという実感もありません。しかしイエス様の「行きなさい」という言葉だけを信じるのです。ここが、今日の一つのポイントです。わたしたちは、肉体を持ったイエス様に出会うことはできません。手を触れていただくこともないでしょう。しかし、イエス様が共にいてくださるといふ約束を胸に、歩むのです。イエス様が必ず、わたしたちを生きる者にしてくださると信じるのです。それが信仰なのです。

彼ら 10 人は、祭司の元に向かいました。ここまでは皆、合格です。しかしもう一つ大事なポイントがあります。10 人は祭司の元に行く途中に、イエス様の言葉通りにいやされます。そのとき 9 人は、そのまま祭司の元へ急ぎます。祭司に体を見せると、



自分が元いた共同体に戻れるのです。彼らは喜び踊って行ったことでしょう。

けれども 1 人だけは、イエス様の元に戻ってきました。自分が清くされたことに驚き、大声で神さまを賛美しながら、イエス様に感謝を伝えるために戻って来ました。9 人とこの 1 人の違いは、ユダヤ人とサマリア人という違いだけでした。

聖書に出てくるユダヤ人は、自分たちを神さまから選ばれた者だと思っていました。イエス様にいやされながらも感謝することのなかった 9 人の心には、自分たちは選ばれた民であり、救われて当然だという思いがあったのかもしれない。そしてサマリア人のことを、救いから外れた人だと蔑んでしました。

わたしたちの心の中にも、同じような思いがないでしょうか。自分は神さまに手を差し伸べられて当然なのだ。自分は正しい人間なのだからという思いが。

そうではないのですね。神さまはわたしたちを一方向的に憐れんでくださいます。それはわたしたちが素晴らしいことをしたからでも、良い人間だからでもないのです。このサマリア人のように、神さまから遠く離れた小さな一人なのです。

しかし神さまは、その小さな一人にも目を向けられます。わたしたちはそのことに対し、心から感謝をささげたいと思います。主に感謝！

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>